武石弘三郎作《船田兵吾像》について

伊澤朋美

2015（平成27）年度に作品調査を行った《船田兵吾像》は、武石弘三郎[1]の基礎資料『塑像家・武石弘三郎ノート』[2]に既出の作例である。同資料には1929（昭和４）年の作例として登場し、作新学院の前身である下野英学校校内に設置され、後に聴蛙館が建てられたのを期に移されたと記述されるが、今回調査したところ、1952（昭和27）年制作であることが判明した。当像の情報を以下に整理し、報告するとともに、制作の経緯について推測を加えたいと思う。

【図1】
船田兵吾像

1　像の状態

《船田兵吾像》は、栃木県宇都宮市一の沢にある作新学院（高等学校・中等部・小学部・幼稚園）キャンパス内に建つ講堂「聴蛙館」３階ホール入口に設置されている【図１】。現在の聴蛙館は２代目の建物であり、初代聴蛙館の設立は1952（昭和27）年。「聴蛙」とは、船田兵吾の号である[3]。像は木製の台座上に設置されており、台座前面には「船田兵吾先生之像」と書かれた金属製プレートが嵌め込まれている。

像の背面左下には「昭和二十七年　弘三郎作」と制作年とサインが刻まれることから、新潟県長岡市出身の彫刻家・武石弘三郎の作であることがわかる【図２・３】。像はブロンズ製で、一部緑青などが見られるものの、状態は良好。大きさは、横幅66.9×高さ67.5×奥行37.5cmである。

【図2・3】
船田兵吾像背面と、制作年・サイン

1　武石弘三郎（1877［明治10］～1963［昭和33］年）…新潟県長岡市（旧：南蒲原郡中之島村）出身の彫刻家。東京美術学校塑像科を卒業し、卒業後はベルギーへ留学。帰国後は《松本順・石黒忠悳像》をはじめ、《森鷗外像》など、軍人、政治家、博士など著名人の肖像彫刻を数多く手掛け、設置例は全国に及んだ。

2　佐々木嘉朗『彫塑家・武石弘三郎ノート』北日本美術，1985年

3　作新学院編『百年誌』作新学院，1985年　p.98

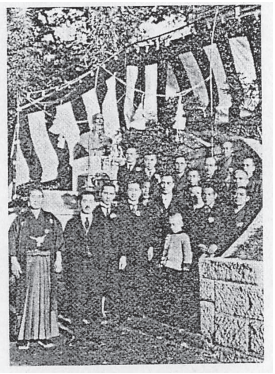
2　像主・船田兵吾について

像のモデルになっている船田兵吾（1868［明治元］～1924［大正13］年）は、作新学院の前身となる「下野英学校」を宇都宮に創立した、作新学院の創立者とされる人物である。下野英学校はその後二里山（現在の栃木県立図書館の地）に移転、その翌年1888（明治21）年には経営難に陥り一時閉校となるが、旧黒羽藩の藩校「作新館」の名を継承し、「私立作新館」として再興。1899（明治32）年、中学校令改正により校名を「私立下野中学校」、1919（大正８）年には「下野中学校」と改称した。この頃には学校は順調に発展をとげ、全校生徒も700人に達したという。しかし大正13年、卒業証書偽造事件が問題化、行政による学校運営への干渉が行われるようになり、1940（昭和15）年まで下野中学校は船田家の経営を離れることになった。県による学校への補助金交付も中止され、心労を重ねた兵吾は、既に病を患っていたこともあり1924（大正13）年12月11日、帰らぬ人となった。

船田兵吾が没してから５年後の1929（昭和４）年12月６日、船田兵吾像の除幕式が行われた。式典の写真には兵吾の像を前に参列する第６回卒業生と、その中央に長男・船田中（1895［明治28］～1979［昭和54］年）の姿、中のすぐ前に中の長男・譲（当時小学生）の姿が見られる【図４】。中は、当時東京市助役を辞任後、東京市の嘱託となり６ヶ月にわたる初の欧米視察を終え、政界に入るための準備をしていた頃であった。像の発注に中が関わっていたかどうかは、資料も無く不明だが、彼が何かしら関わりを持っていたと想像される。

図４の写真を見ると、像は当初屋外、学校正門へと続く坂道の入口付近に設置されているようである。また、現状のような木製の台座ではなく、石製の台座上設置されていた。像には船田中の岳父である元田肇（1858［安政５］～1938［昭和13］年）による撰文が付せられたという。

1931（昭和６）年当時の、キミ夫人と中が胸像前に立つ写真を見ると像と台座の造形がより鮮明に見て取れる【図５】。さらに『下野日報 作新館高等女学校開校記念号』（1941［昭和16］年５月１日）まで、当像の姿が確認できるが、以降当像に関する写真や記述は見当たらず、その後この像がどのような経緯を辿ったかは、定かではない。[4]



【図4】
除幕式の写真
（作新学院編『百年誌』掲載）

【図5】
船田兵吾像の前に立つキミ夫人と中
（作新学院編『百年誌』掲載）

少し話は逸れるが、除幕式の際に捧げられたと見られる祝詞があり、以下に抜粋する。

下野中學校長　勲六等船田兵後大人乃霊祭々詞

學の園の此狭庭を祓へ清めて、禁竹建て神籬設け招ぎまつり座せまつる、勲六等船田兵吾大人命の御霊の御前に齋主従五位村田正夫謹み敬ひも白さく、大人命の現世に顯座せるや、その賢き性に文を學び、その健き魂に剣を修めて麗しく、嚴しく、まこと春秋をかねたらむ如き人格者となも世に稱へられませりける、宣なるかも夙に教育の道に志望を進められ、明治の十六年に下野英學校を江野町に創建し、次で此の二里山上に移轉され、爾來、私立作新館、私

4　学校の歴史、船田兵吾、船田中の略歴や、除幕式については前掲3を参照。

立尋常中學作新館、私立下野中學校等と度々改稱せられしが、其はやがて又、其内容の彌進み、彌新なる證明にこそ有りけれ、如斯で明治四十四年に文部大臣の認定となり、大正の八年にまた現今の下野中學校と改稱せられ、夫やがて永き名と定められぬ越えて大正の十四年の冬に至るまで四十年にも餘る長き月日を倦まず僥まず、墨繩の唯一筋に勤給ひ勉給へり、故茲に、大人の高德を仰ぎ、斯園の學風を慕ひて、四方より集來ける子弟などは雲のごとく、潮のごとく學の業卒へし者のみにても三千人の多きになるも及ひける、官また其功勞を嘉したまひ賞めたまひて縣廳より、はた文部省より度々表彰され、宮内庁よりは勲六等を授けたまふ、天晴れ其の高德は學園と共に朽つる事なく、其功勞は銅像と共に消ゆる時なく千代に照り萬世に輝きなむ、茲に關係有る人々、はた、御教受けし人々、片絲の伊寄集ひて、小春日の今日を吉日と齋定めて、御前に禮代の御饌御酒種々の味物を机代に供へまつり御霊祭仕へまつらくを平らけく安らけく受けたまひ聞しめして、山河の彌遠永に斯國をも守りたまひ後人をも導きたまひて、兎もすれば蟹が這ふ横さの道に迷入る世の人々をも、直毘の霊の直く正しく立還らしめたまへと、山鳥の尾呂の長辭繰返しつゝ謹み敬ひも白す。

昭和六年十二月六日（銅像除幕式）[5]

このように、銅像の除幕式において祝詞が捧げられ、霊祭的な性格も併せ持っていたというのは、当時の銅像に対する態度が伺え興味深い[6]。学校創立者の顕彰像としてだけでなく、遺族たちにとっては家族の姿を現世にとどめる特別な像であり、没後５年という節目に完成した像を前に、強く追慕の情を抱いたことだろう。

３　像の特徴と設置に関して

弘三郎作品では、サインと制作年の表記の仕方に以下のような特徴が見られる。現在最も多く見られるタイプは、当館所蔵の《裸婦浮彫》に見られるように「K. TAKEISHI. KIGHÉN 2599」とローマ字でサインと制作年が刻まれているものである【図６・７】。またこの《裸婦浮彫》は、皇紀で制作年が表記されている点において時代性を反映する作例であるが、新潟市内に現存する《竹内式部像》も同じく皇紀で制作年が表記されており、「武石弘三郎作」とサインも和文で記されている【図８・９】。また、長岡市内にある1960（昭和35）年作の《友情の双像》は、「K. TAKEISHI. KAMAKOURA 1960」「八十四翁　弘三郎作」ローマ字と和文によるサイン両方が刻まれていることが確認できる【図10・11】。現存例の確認が充分ではない中でも、珍しいタイプである[7]。また当作では「KAMAKOURA」（原文ママ）と、当時居住していた鎌倉で制作したことも併せて記されている[8]。

さて、《船田兵吾像》では、和文で「昭和二十七年　弘三郎作」と刻まれており、これまで筆者が見たことの無い新たなタイプである。弘三郎の作例の確認が充分でない中、また当像にまつわる資料が少ない中、確かな判断はできないが、おそらく弘三郎自身、もしくは弘三郎のアトリエで制作された作品と考えられるだろう。サインの文字の形態を見ると、同じく和文で記された《竹内式部像》、《友情の双像》の文字の癖にいくつか共通点が見られる。

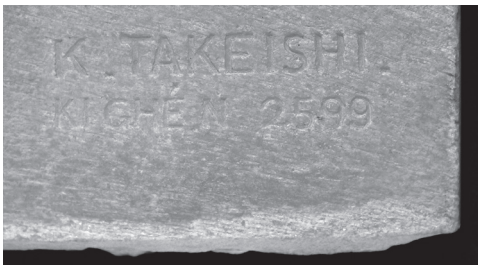
5　田代善吉『船田兵吾先生』（1946年、下野史談会）当資料は1946（昭和21）年に行われた復興祭（作新学院行事か）に際して執筆されたとされる。当資料では除幕式の行われた年が1931（昭和6）年と記述されているが、他の文献においてはすべて1929（昭和4）年とされるため、誤記であると考えられる。

6　大坪潤子氏は、銅像には、「公には像主の記念や顕彰を目的とするものの、建設する背景には像主への哀悼や追慕といった純粋で私的な思いや、礼拝・供養・慰霊という行為も含まれている」とし、ヒトのかたちを現すという行為において根源的な動機であると述べている（大坪潤子「第四章 銅像・記念碑」『近代日本彫刻集成第一巻 幕末・明治編』国書刊行会, 2013年6月［初版：2010年9月］）。その下地には武将の肖像や禅宗における祖師像、墓石像など、礼拝や供養のために肖像を制作してきた日本の伝統があり、銅像に対するこのような態度は、現在においても息づいていると考えられる。

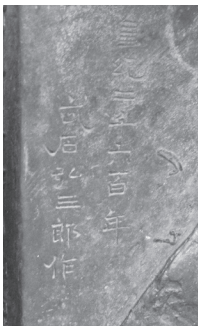
7　その他、確認できているサインのタイプとして、丸に「K.T」という表記が、初期の作例である《川端玉章像》（1911［明治44］年原型完成・1914［大正3］建立、東京藝術大学構内）に見られる。

8　同じく晩年に作られた《久須美東馬像》（1959［昭和34］年、新潟県弥彦村弥彦公園内）では「K. TAKEISHI. KAMAKURA 1959」と表記されている。このように弘三郎が当時居住していた土地名を付記するタイプも散見される。

【図6】
武石弘三郎《裸婦浮彫》
1939（昭和14）年　当館蔵



【図7】
《裸婦浮彫》右下　サインと制作年
「K. TAKEISHI.　KIGHÉN 2599」



【図8】
武石弘三郎《竹内式部象》
1940（昭和15）年
旧新潟市立二葉中学校前公園内
（筆者撮影）

【図9】
《竹内式部象》台座上
サインと制作年
「皇紀二六〇〇年　武石弘三郎作」

【図10】
武石弘三郎《友情の双像》　1960（昭和35）年
若宮神社境内（中之島町長呂［現・長岡市長呂］）（筆者撮影）

【図11】
《友情の双像》背面　サインと制作年
向かって左「K. TAKEISHI.　KAMAKOURA 1960」
右「八十四翁　弘三郎作」

当初像が、除幕式の行われた1929（昭和４）年に完成したことは間違いないと思われる。だがその後、『弘三郎ノート』の記述にあるように像は移されたのではなく、恐らく戦火により焼失・もしくは供出などで行方がわからなくなり、船田兵吾の号を冠する聴蛙館が建てられた際に、再制作されたのではないかと推測する。その際、野外から館内へと像が移されたのではないか。1929（昭和４）年制作時の石膏型が学校などで保管されていたかどうかは不明であるが、粗い画像ではあるが、図４、５のような当時の像とも雰囲気が異なるようにも見える。像の表面には指紋や、胸の勲章の細かい模様まで表されており、当初像から孫抜きしたという可

能性も考え難いのである。

いずれにせよ、上記は現段階の推測にすぎない。また、弘三郎に像の制作が発注された契機など、興味深いが不明な部分が多く残っている。しかし今回現存作の限られる弘三郎の作例が実見でき、制作年に関連して新たな情報が得られたことは、非常に貴重であった。引き続き本県出身の彫刻家として、現存作の調査を進めていきたい。

本像調査の機会を設けてくださった、作新学院高等学校入試広報室・髙橋史朗先生、栃木県立博物館・本田諭学芸員にこの場をかりて感謝申し上げます。

（新潟県立近代美術館　主任学芸員）